

## ネヘミヤ記4-6章 「敵の策略」

### 1A 民への攻撃 4

1B そしり 1-6

2B 混乱 7-14

3B 防御しながらの仕事 15-23

### 2A 内部問題 5

1B 貧しい者の虐げ 1-5

2B 重荷の担い 6-13

3B 仕える指導者 14-19

### 3A 指導者への陰謀 6

1B 「話し合い」という妨害 1-3

2B 「中傷」に応える誘い 4-9

3B 御言葉に背かせる教師 10-14

4B 騙される代表者ら 15-19

## 本文

ネヘミヤ書4章を開いてください。私たちは、神の民の守り固めについて学んでいます。これから読む4章から6章は、ネヘミヤ記の中核となる部分です。あらゆる形の敵の策略を見ていきます。パウロは、「私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。(2コリント 2:11)」と言いました。しかし、ネヘミヤはこの城壁再建をたった五十二日間で終わらせるのです。神の働きは反対を受けながら、勢いよく進むのだということを思います。そしてその策略を完全に無きものとします。

### 1A 民への攻撃 4

1B そしり 1-6

4:1 サヌバラテは私たちが城壁を修復していることを聞くと、怒り、また非常に憤慨して、ユダヤ人たちがあざけた。4:2 彼はその同胞と、サマリヤの有力者たちの前で言った。「この衰れなユダヤ人たちは、いったい何をしているのか。あれを修復して、いけにえをささげようとするのか。一日で仕上げようとするのか。焼けてしまった石をちりあくたの山から生き返らせようとするのか。」4:3 彼のそばにいたアモン人トビヤもまた、「彼らの建て直している城壁なら、一匹の狐が上っても、その石垣をくずしてしまうだろう。」と言った。

周囲の敵が城壁が建て直されているのを見て、まず初めに行ったことは「あざけり」であったことを、私たちは先週の学びで見ました。私たちの内に神が良い働きを始められると、サタンは必ず私たちを目で見えるものによって貶めようとします。確かに、周囲にある行政区と比べれば、ユダヤ地区はあまりにもちんけで弱々しいです。サマリヤ人の軍隊も、この城壁建設を目にしています。

こんな城壁、簡単に壊せるのにと嘲っているのです。同じように、私たちをサタンは責めます。愚かで、弱いからこそ神が私たちをキリストの十字架を通して救われたのに、その愚かさや弱さをことさらに責め立てるのです。私たちはしばしば、それを自分の至らなさや過ちであるとして自分を責めています。神が進ませておられる働きなのに、敵はあたかも自分自身で行っているのだと問題のすり替えを行い、そしてできていないことをことさらに取り上げるのです。この策略にだまされてはいけません。

4:4 「お聞きください、私たちの神。私たちは軽蔑されています。彼らのそしりを彼らの頭に返し、彼らが捕囚の地でかすめ奪われるようにしてください。4:5 彼らの咎を赦すことなく、彼らの罪を御前からぬぐい去らないでください。彼らは建て直す者たちを侮辱したからです。」

ネヘミヤは、敵の攻撃に対して祈りによって対応しています。ネヘミヤは、はっきりと神の召命を受け取っていました。建て直しは、自分たちのしていることではなく、主が命じられたことなのです。ですから彼らが侮辱しているのは、自分たちに対してではなく、神ご自身に対するものなのです。ここが、彼にははっきりしていました。したがって大切なのは、しっかりとした祈りです。彼は、ペルシヤのシュシャンにて、四か月にも及ぶ、悔い改めと願い求めの祈りに専念していました。そこで受けた神の召しですから、今、このような嘲りを受けても揺るがないのです。私たちに必要なもの、この熱心な祈りです。時間をかけて、自分がこの教会に召されたことについて、その御心を求める祈りを捧げましょう。

4:6 こうして、私たちは城壁を建て直し、城壁はみな、その高さの半分まで継ぎ合わされた。民に働く気があったからである。

「こうして」という接続詞が大事です。城壁が高さの半分まで継ぎ合わされた、ということだけを聞いたなら、それが順風の中で行われたものだとして誤解してしまいます。そうではなく、このような嘲りを受けて、けれども祈りを捧げ、その中で働く気力を維持させて、それで高さの半分まで継ぎ合わされた、という意味です。私たちは、結果ばかりを見てしまいます。例えば、カルバリーチャペルにおけるイエス革命において、怒濤のごとく若いヒッピーたちが水のバプテスマを受けている姿を見て、「すごいな」と思うかもしれません。けれども、その神の御働きを自分のものとして受け取ることできたチャック・スミスがおり、彼は17年間の神からの訓練によって、初めて神の心と自分をついにするよう、従順になることができたのです。数多くのヒッピーが救いにあずかった、ということよりも、その十七年間の中にある知恵こそが大切な過程であり、ネヘミヤも「こうして」という言葉でそれを言い表しています。

## 2B 混乱 7-14

4:7 ところが、サヌバラテ、トビヤ、アラブ人、アモン人、アシュドデ人たちは、エルサレムの城壁の修復がはかどり、割れ目もふさがり始めたことを聞いたとき、非常に怒り、4:8 彼らはみな共にエ

エルサレムに攻め入り、混乱を起こそうと陰謀を企てた。4:9 しかし私たちは、私たちの神に祈り、彼らに備えて日夜見張りを置いた。4:10 そのとき、ユダの人々は言った。「荷をになう者の力は衰えているのに、ちりあくたは山をなしている。私たちは城壁を築くことはできない。」4:11 一方、私たちの敵は言った。「彼らの知らないうちに、また見ないうちに、彼らの真中にはいり込んで、彼らを殺し、その工事をやめさせよう。」4:12 そこで、彼らの近くに住んでいたユダヤ人たちがやって来て、四方から十回も私たちに言った。「私たちのところに戻って来てほしい。」

敵どもの第二の攻撃は、内部に対する混乱です。そのためにネヘミヤは、人々に祈りをするようにさせ、そして日夜見張りを置きました。祈りをして、見張りをしていたので、ネヘミヤは敵のこの陰謀に恐れてはいませんでした。実際に工事をしているユダヤ人たちは、影響を受けてしまいました。それが「落胆」という形で現れました。彼らは荷をになっていたので力がなくなっていました。が、目の前に見える仕事は途方もなく大きい、と嘆きました。けれども、これはサヌバラテが嘲けた言葉そのものです。神に目を留めないで、自分たちの姿を見ってしまうことを、徐々に行ってしまいました。

それだけではありません。具体的な攻撃計画を彼らは立てていました。それをエルサレムの外に住んでいるユダヤ人たちに、彼らの陰謀が耳に入ってきました。それで恐れが彼らの心をつかんでしまったのです。「四方から十回も」とあります。しかも、「私たちのところに戻って来てほしい。」と言っています。彼らのところに戻っていったら、エルサレムの城壁工事は中断してしまいます。ネヘミヤとしては、人間的な対処をするのであれば、その恐れに対処するためのセラピーでもするために出ていくのでしょうか。しかし、彼の召しはそこにはありませんでした。そして、彼が行ったところで、決して解決するものではなかったのです。救いは自分ではなく、神にあるからです。

4:13 そこで私は、民をその家族ごとに、城壁のうしろの低い所の、空地に、剣や槍や弓を持たせて配置した。4:14 私は彼らが恐れているのを見て立ち上がり、おもだった人々や、代表者たち、およびその他の人々に言った。「彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え、自分たちの兄弟、息子、娘、妻、また家のために戦いなさい。」

ネヘミヤは、彼らが落胆と恐れの中流されていきそうになっていたのを、歯止めをかけました。ネヘミヤは、「どうしようもないな。」となじるのではなく、彼らが弱くなっているところにすかさず行きました。使徒パウロは、「気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。(1テサロニケ 5:14)」と言いました。

彼がまず行ったのは、武器を持たせたことです。家族ごとに父親を集めたのでしょうか。彼らに武器を持たせて、彼らが敵に戦うように備えさせたのです。なぜなら、自分たちが用意している武装組織では、急襲された時に間に合わないからです。彼らには自分たちで戦わなければいけないとなると、とても不安だったのでしょうか。恐れていました。そこでネヘミヤが言ったのです。「彼らを恐

れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え」なさい、ということです。先週の日曜日の礼拝で話しましたように、主を恐れれば、人を恐れなくなります。主が命じられたことなので、この方を畏れ敬うのであれば、そこに人への恐れがなくなるのです。

そしてもう一つ大事なものは、「自分たちの兄弟、息子、娘、妻、また家のために戦いなさい。」ということです。自分たちの兄弟とは、ユダヤ人共同体のことです。そして共同体のためだけでなく、家族の守りのためにも戦うのだ、ということです。キリストの共同体のためにも私たちは戦います。そして、それはそれぞれにおける家における霊の戦いでも戦うことを意味します。

### 3B 防御しながらの仕事 15-23

4:15 私たちの敵が、彼らのたくらみは私たちに悟られ、神がそれを打ちこわされたということを聞いたとき、私たちはみな、城壁に帰り、それぞれ自分の工事に戻った。

ネヘミヤの特徴は「祈り」でありましたが、もう一つの特徴は「神に栄光を帰する」ことです。神がそれを打ち壊された、と言っています。自分が強い指揮をしたのにも関わらず、これらのことをしているのはすべて神なのだという事実を忘れませんでした。ここに彼の霊的な指導力の源がありました。そして、もう一つ、「それぞれ自分の工事に戻った」とあります。工事を行わせるという、神から与えられた仕事にすぐに戻りました。しなければいけないことはするのですが、何のために今、自分はエルサレムにいるのか、その使命と召命を忘れませんでした。

4:16 その日以来、私に仕える若い者の半分は工事を続け、他の半分は、槍や、盾、弓、よろい、身を固めていた。一方、隊長たちはユダの全家を守った。4:17 城壁を築く者たち、荷をかついで運ぶ者たちは、片手で仕事をし、片手に投げ槍を強く握っていた。4:18 築く者は、それぞれ剣を腰にして築き、角笛を吹き鳴らす者は、私のそばにいた。4:19 私はおもだった人々や、代表者たち、およびその他の人々に言った。「この工事は大きく、また広がっている。私たちは城壁の上で互いに遠く離れ離れになっている。4:20 どこでも、あなたがたが角笛の鳴るのを聞いたら、私たちのところに集まって来なさい。私たちの神が私たちのために戦ってくださいなのだ。」

ネヘミヤは、一度、敵が撤退したからといって、それでずっと攻撃をしてこないなどと思っていませんでした。勝利しても、目を覚まして守り固めるのです。それで彼は、しっかりと防衛体制を作りました。若者の半分は工事で働かせましたが、残りの半分は防衛隊にさせました。そして、それに専念する隊長たちも立てました。さらに仕事をしている者たちにも武器を持たせました。荷をかついでいる者は、片手は手を空けることができるので、片手に投げ槍を持たせ、両手を使って壁を作っている者は腰に剣を持たせました。

そして大事なものは、招集です。万が一、敵が攻めてきた時に彼らを呼び出さなければいけません。それで角笛を吹き鳴らす者を自分のそばに付かせて、いつでも緊急時代になれば吹き鳴らす

ようにさせたのです。そして、ネヘミヤは、「神が私たちのために戦ってくださるのだ」と励ましました。自分たちは動いているのですが、神が戦ってくださいます。

4:21 こうして、私たちはこの工事を進めたが、その半分の者は、夜明けから星の現われる時まで、槍を手を取っていた。4:22 そのときまた、私は民に言った。「だれでも自分に仕える若い者といっしょにエルサレムのうちで夜を明かすようにしなさい。そうすれば、夜にも見張りがおり、昼には働くことができる。」4:23 私も、私の親類の者も、私に仕える若い者たちも、私を守る見張りの人々も、私たちのうちのだれも、服を脱がず、それぞれ投げ槍を手にしていました。

二十四時間体制で守っていました。エルサレムの外に住んでいる者たちも、もしかしたら外で危害を受けるかもしれません。ここで服も脱がないで寝泊まりしなさいとネヘミヤが言っています。いつでも目を覚ましています。祈っています。これを文字通り行う教会もあります。コスタメサの教会では以前、24 時間の祈りという奉仕がありました。男たちが分担して、決められた時間に教会に寄せられた祈りを主の前に持っていくのです。「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。(エペソ 6:18)」

そして素晴らしいのは、ネヘミヤは彼らといっしょにいたことです。彼も、そして、縁故主義と言われないように親類も、自分が雇っている若者たちもみな、服を脱がずに共に夜を過ごしました。指導者はいつも、その民と共にいることで彼らを率います。

## **2A 内部問題 5**

そして工事ははかどっていきました。しかし、内部に深刻な問題が発生しました。4章においては、敵が外部から攻撃していましたが、ここでは見えない敵が内部で攻撃しています。その敵とは、今朝お話ししましたように、私たち自身です。私たちが自分自身を求める、その自己中心性が神の働きを妨げます。

### **1B 貧しい者の虐げ 1-5**

5:1 ときに、民とその妻たちは、その同胞のユダヤ人たちに対して強い抗議の声をあげた。5:2 ある者は、「私たちには息子や娘が大ぜいいる。私たちは、食べて生きるために、穀物を手に入れなければならない。」と言い、5:3 またある者は、「このききんに際し、穀物を手に入れるために、私たちの畑も、ぶどう畑も、家も抵当に入れなければならない。」と言った。5:4 またある者は言った。「私たちは、王に支払う税金のために、私たちの畑とぶどう畑をかたにして、金を借りなければならなかった。5:5 現に、私たちの肉は私たちの兄弟の肉と同じであり、私たちの子どもも彼らの子どもと同じなのだ。それなのに、今、私たちは自分たちの息子や娘を奴隷に売らなければならない。事実、私たちの娘で、もう奴隷にされている者もいる。しかし、私たちの畑もぶどう畑も他人の所有となっているので、私たちにはどうする力もない。」

「強い抗議の声」という言葉が使われています。これは、イスラエルがエジプトで奴隷として働かされている時、叫んだあの声と同じ言葉が使われています。主がモーセに、「追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。(出エジプト 3:7)」と言われました。このような奴隷状態に、なんと同胞のユダヤ人がさせていたのです。貧しさで苦しみの極みに達していたユダヤ人が、富を握っているユダヤ人に叫びを上げたのでした。

ここで気をつけなければいけないのは、城壁再建工事を行ったことによってこのような経済格差が生まれたということではありません。元々このような問題があったけれども、城壁再建工事によって浮き彫りにされた、露わにされたと言ったほうが良いです。主が、ご自分の民の間で事を行われる時に、聖なる御霊が働かれるので、肉の行いをそのままにさせることはありません。世においては、当たり前のように行われていることであり、殊更に咎められることはありません。けれども、神の共同体では違います。私たちは世から聖別を受けた者たちです。私たちは、全く異なる原理で生きるように召されています。けれども、この世での生き方、この世での価値観でこの共同体に留まると、神はそれを肉の醜さとして露わにしてあぶり出されるのです。

抗議には、三つの事がありました。一つ目の抗議は、大きな所帯を抱えていた人々です。家族全員の食糧を得ることができないというものでした。二つ目の抗議は飢饉が起こったことです。それによって、食糧を得るために自分の畑や家を抵当に入れなければいけませんでした。ですから、二つ目の人々のほうが、一つ目の人々より窮乏しています。けれども、最悪なのは三つ目の人々です。ペルシヤ王に対して支払う税金のために、負債を抱えました。けれども、返済できません。土地や家は売却してしまったので、そこからお金を捻出することができません。それで、何と自分の息子と娘を異邦人に身売りしなければいけなかったのです。

ここで富んでいる人々は何をしていたかと言いますと、まず食糧を得ることのできない大所帯の人々には、何ら助けの手を伸ばしませんでした。普通にお金を貸していましたが、普通に利息をつけて貸していました。12%の利率の利息です。そして、抵当に畑や家を入れていた人々にも同じようにお金を貸していました。さらに、奴隷として異邦人に身売りに出たユダヤ人については、その異邦人に彼らを買って利益を上げていました。一般社会的には、あり得ることでしょう。当時の社会状況では当たり前でした。しかし、神の民の間では絶対にあってはならないことでした。モーセの律法でこのことが起こらないよう厳に戒めていた、まさにそのことを行ないました。

私たちがキリストのものとなった時に、私たちはキリストを互いに分かち合うようになりました。教会というのは、キリストを分かち合い、それぞれがその御体の一部になっている存在です。キリストによって救われた、そして天の御国に入るといふ喜びを個人のものにしているのは、真理ですが、神のご計画は個人的救いだけではなかったのです。「父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。(ヨハネ

17:21)「父と子が一つであるように、それぞれ一体にさせられた者たちが互いに一体になるというのが、キリストが父なる神に祈られたことです。それによって、世に対してイエスが神からの方であることを知るようになります。

したがって、しなければいけないことは「共有」することです。持っている者が持たない者に分け与えることです。そして持たない者が売ってしまった土地や家を買戻してあげることです。そして、奴隷に売られてしまった者たちは、何としてでも緊急に買戻すことです。そして、負債は帳消しにします。このようにして初めて、イスラエルの民はエジプトで味わった苦しみを二度と味わうことなく、神の所有の民、自由人となることができます。

ですから、キリストの体の中にも「自分」というものは存在しません。あるのは、頭なるキリスト、そして他者への労りです。そのことによって、体全体が健康に機能します。ですから私たちは、そろそろ「交わり」という定義を変えねばなりません。それは、受ける交わりではなく、与える交わりです。キリストによって受ける者はその恵みを他者に分かち合う、つまり与えることによって自分自身がキリストの恵みにあずかれます。人に仕え、人を愛することによってキリストの愛を知ります。確かに、キリストの愛を知らなければ人を愛することはできません。けれども、キリストの愛に留まる者は自分を捨て、自分を忘れ、他者を愛さざるを得なくなり、そして愛しているからこそキリストが自分を愛しているという確信を保つことができるのです。これが交わりです。

使徒パウロによる、次の言葉を私たちは守ることによって、ネヘミヤの時のユダヤ人共同体にあったような不一致と内部分裂を避けることができます。「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、「あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にもふりかかった。」と書いてあるとおりです。(ローマ 15:1-3)」そして、この後に私たちは同じ思いを持ち、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえることができる、と言っています。

## 2B 重荷の担い 6-13

5:6 私は彼らの不平と、これらのことばを聞いて、非常に怒った。5:7a 私は十分考えたうえで、おもだった者たちや代表者たちを非難して言った。「あなたがたはみな、自分の兄弟たちに、担保を取って金を貸している。」と。

ネヘミヤは怒り狂いました。これは、間違ったことでしょうか？いいえ、聖い怒りです。正しい怒りです。それは、弱者に対しての虐げを見ての怒りであり、そして弱者を虐げることによる怒りを発する神ご自身の怒りであります。

しかし、ネヘミヤは、その後、十分に考えました。その怒りに任せて行動に移さなかったのです。

このバランスが彼の敬虔さを表しています。思い出すのは、使徒パウロです。アテネにいた時に、「町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。(使徒 17:16)」とあります。しかし、彼はアレオパゴスの丘で語る時は、とても同情に溢れたものでした。「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。(17:22)」彼は、偶像礼拝を糾弾するのではなく、彼らのしていることを理解している、分かっていると彼らの宗教心を受け止めるところから始めたのです。偶像礼拝に対する憤りは正しいものでした。けれども、「熱心だけで知識のないのはよくない。(箴言 19:2)」とあるとおりで、憤ったままにははいけません。

そこでネヘミヤは、感情を移入させずに、淡々と、肅々と、この罪に対峙しました。まず、呼び出したのは代表者らや主立った者たちです。その後で大集会を開きます。この順番は大事ですね、イエス様も誰かが罪を犯したら、まず本人のところに行ってその兄弟を責めなさい、と言われました。悔い改めなければ、二人、三人の証人によって話し、それでも悔い改めなければ、会衆の中で罪を責めます。そして繰り返しますが、「責める」というのは糾弾する、あるいは吊し上げることではありません。罪をそのまま本人に告げることであり、自分もその罪を犯しえることを恐れながら告げるのです(ガラテヤ 6:1 参照)。

その内容は、担保にして金貸しをしているということです。これは、聞いているユダヤ人たちは、はっきりとモーセの律法に違反したことであることを気づくものでした。出エジプト記 22 章などに、貧しい人には金貸しのようにしてはならない、利息を取ってはならない、質はその日のうちに返しなさいと命じられています(22-26 節)。そしてネヘミヤは、「自分の兄弟たちに」と言いましたが、神ご自身も、「わたしの民のひとりで」と言われています。つまり、一つの神の家なのだ、私たちは心一つにしているのだ、ということです。

5:7b 私は大集会を開いて彼らを責め、5:8 彼らに言った。「私たちは、異邦人に売られた私たちの兄弟、ユダヤ人を、できるかぎり買い取った。それなのに、あなたがたはまた、自分の兄弟たちを売ろうとしている。私たちが彼らを買わなければならないのだ。」すると、彼らは黙ってしまい、一言も言いだせなかった。

先ほど話したように、モーセの律法には、貧しくなった兄弟が異邦人に売られるのであれば、どのようなことをしても買い取らなければいけないと命じています(レビ 25 章参照)。そのことによって、ユダヤ人共同体は自由人としての一致を保つことができるのです。しかし今、彼らのしていることでこの共同体は建て上げられるのではなく、崩されているのです。

5:9 私は言い続けた。「あなたがたのしていることは良くない。あなたがたは、私たちの敵である異邦人のそしりを受けないために、私たちの神を恐れながら歩むべきではないか。」

ネヘミヤが、この工事を開始させる時に、彼らに言った言葉は、「エルサレムの城壁を建て直し、



もうこれ以上そしりを受けないようにしよう。(2:17)」というものでした。けれども、ユダヤ人が同じユダヤ人を苦しめる姿は、間違いなく敵のそしりとなります。「神を恐れながら歩むべきではないか」とネヘミヤが言っているのは、誰も見ていなくとも、誰にも責任を取らなくてよくとも、神に対しては申し開きしなければいけないのだ、ということです。

5:10 私も、私の親類の者も、私に仕える若い者たちも、彼らに金や穀物を貸してやったが、私たちはその負債を帳消しにしよう。5:11 だから、あなたがたも、きょう、彼らの畑、ぶどう畑、オリーブ畑、家、それにまた、あなたがたが彼らに貸していた金や、穀物、新しいぶどう酒、油などの利子を彼らに返してやりなさい。」

ネヘミヤは、極めて優れた指導者です。それは、自分がまず見本を示す人だからです。指導するとは、自分が初めに出ていき、それから他の人々が付いていくことができる人です。まず、自分が貸しているものを帳消しにしました。そして、ここでの「利子」という言葉は、直訳は「百分の一」です。月に対して一パーセントの利率ということなので、年率に換算すると十二パーセントであります。利子分も含めて帳消しにきなさい、と命じています。

私たちは、赦しということはこの原則を当てはめるべきでしょう。英語で赦すという言葉と帳消しにするという言葉は、聖書では同じforgiveが使われています。人が罪を犯すことは、ちょうど相手に借金を作ってしまったことと同じです。赦すことは、その負債を帳消しにすることです。「互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。(コロサイ 3:13)」

5:12 すると彼らは、「私たちは返します。彼らから何も要求しません。私たちはあなたの言われるとおりにします。」と言った。そこで、私は祭司たちを呼び、彼らにこの約束を実行する誓いを立てさせた。5:13 私はまた、私のすそを振って言った。「この約束を果たさない者を、ひとり残らず、神がこのように、その家とその勤労の実とから振り落としてくださいますように。このように、その者は振り落とされて、むなしい者となりますように。」すると全集団は、「アーメン。」と言って、主をほめた。こうして、民はこの約束を実行した。

彼らは応答しました。けれどもネヘミヤは、それだけで終わらせませんでした。応答したことを、祭司たちの前で誓わせたのです。つまり、自分自身に対して念じたのではなく、ネヘミヤや他の人々の前で誓ったのではなく、主に対して約束を果たすということです。ですから、これは非常に霊的な重大問題であり、申し開きをしなければいけないという類いのものにしました。これは、英語で言いますと、アカウントビリティーと言います。ヘブル書 4 章 13 節が適切です。「造られたもので、神の前で隠れおこせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」

### 3B 仕える指導者 14-19

そして私たちが今朝じっくりと見た、仕える指導者の姿が次にあります。

5:14 また、私がユダの地の総督として任命された時から、すなわち、アルタシャスタ王の第二十年から第三十二年までの十二年間、私も私の親類も、総督としての手当を受けなかった。5:15 私の前任の総督たちは民の負担を重くし、民から、パンとぶどう酒のために取り立て、そのうえ、銀四十シケルを取った。しかも、彼らに仕える若い者たちは民にいばりちらした。しかし、私は神を恐れて、そのようなことはしなかった。5:16 また、私はこの城壁の工事に専念し、私たちは農地を買わなかった。私に仕える若い者たちはみな、工事に集まっていた。5:17 ユダヤ人の代表者たち百五十人と、私たちの回りの国々から来る者が、私の食卓についていた。5:18 それで、一日に牛一頭、えり抜き羊六頭が料理され、私のためには鶏が料理された。それに、十日ごとに、あらゆる種類のぶどう酒をたくさん用意した。それでも私は、この民に重い労役がかかっていたので、総督としての手当を要求しなかった。5:19 私の神。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくしんでください。

ここの箇所の学びをしていた時に、次のような指導者の説明があり、とても気に入りました。ネヘミヤがまさにその人です。英文ですが日本語に訳してみます。「指導者は、負い目をより多く受け入れ、功績をより少なく受け取るが、他の人々がより多く持つために、静かに犠牲を払う人たちでもある。(Leaders are people who accept more of the blame and less of the credit, but they are also people who quietly sacrifice so that others might have more.)」これは相対的なことです。誰かが指導者であり、他の人々がその指導者に従うということも秩序としてありますが、この文章は、キリスト者の霊的成長として、徐々に自分がより良く仕え、それで人々をキリストの願われていることに導くことができるという、相対的な話もしています。

仕えることを知れば知るほど、その人は人々をキリストにあって導く資格と能力を有します。まず仕えるというのは、自らをその中に入れることです。「この教会には愛がない。」と批評いうちは、まだ殿様の立場にいる人です。自分が教会から愛してもらえないと文句を言っている姿であり、教会が自分に仕えてもらえたいと願っている姿です。しかし、仕える人は自分がその教会の部分とみなし、自分が愛の行ないをします。つまり自分が負い目を担うのです。そして仕える人は、自分がやること、またやったことを主張しません。主から語られたから行ったのだ、主が命じられたから行ったのだという確信が強いので、それが自分の功績だと到底思えないのです。そして犠牲を払っているのですが、犠牲を払っているという意識はありません。愛が動機なので、自分が与え、捧げていることに喜びと充足を得ており、その犠牲を主張する必要を感じません。だから、静かに犠牲を払っています。

### 3A 指導者への陰謀 6

そして次の段階の攻撃が、敵から来ます。4章では、ユダヤ人に対する外部の敵からの攻撃で

した。5 章では、内部における不一致の問題でした。6 章は、指導者個人に対する執拗な攻撃です。城壁の完成が近づけばそれだけ、敵の攻撃も陰湿になり巧妙になります。指導者個人にしか分からないので、孤独で熾烈な戦いにもなります。

### 1B 「話し合い」という妨害 1-3

6:1 さて、私が城壁を建て直し、破れ口は残されていないということが、サヌバラテ、トビヤ、アラブ人ゲシム、その他の私たちの敵に聞こえると、..その時まで、私はまだ、門にとびらを取りつけていなかった。..6:2 サヌバラテとゲシムは私のところに使いをよこして言った。「さあ、オノの平地にある村の一つで会見しよう。」彼らは私に害を加えようとたくらんでいたのである。6:3 そこで、私は彼らのところに使者たちをやって言った。「私は大工事をしているから、下って行けない。私が工事をそのままにして、あなたがたのところへ下って行ったため、工事が止まるようなことがあってよいものだろうか。」

破れ口は残されておらず、残りは門に扉をつけるだけになりました。ここまでくれば、恐ろしいのは油断であります。完成が近いのだから、ゆっくり進めても良いだろうという油断に対して、敵はとてつもない攻撃をしかけてきます。

サヌバラテとゲシムは、オノの平野にある村のところで会見をしようと誘っていますが、オノはルダというところで、ヨッパに近いところにあります。サヌバラテの治めるサマリヤ地区との境にあります。エルサレムからそこまで行くのに、高速道路で一時間半ぐらいかかります。そこまで行くのに時間がかかります。そこで会見をしようというのです。つまり、ここでの策略は、「工事以外のことをさせて、工事を止めさせる。」というものです。

このような悪魔の攻略は、私はしばしば受けています。例えば、妻と二人で旅に出ている時に、日本語学校の事務所から電話がありました。私の知り合いの人だということです。そして携帯電話番号を残したそうです。そして私は電話しました。内容は、ロゴス・ミニストリーのウェブサイトに載っている説教の原稿の内容でした。そして、そこに書いてある内容に批判をしはじめました。電波が悪かったので、「こちらにかけ直してくれますか？」と頼んだら、「電話待っています。」との返事です。私は、待っているのに返事しないのはどうしようか？と思いましたが、妻が、「かける必要はない」と断言しました。それで文字メールだけを送り、「聖書の質問であれば、ウェブサイトに記載のメールアドレスに書いて、送ってください。今、旅の途中です。」という内容を送りました。結局、返事はありませんでした。主の与えてくださった大切な夫婦の時間から、聖書の質問という誘いで妨害しようとした敵の攻撃です。

### 2B 「中傷」に応える誘い 4-9

6:4 すると、彼らは同じようにして、四度も私のところに人をよこした。それで私も同じように彼らに答えた。6:5 サヌバラテは五度目にも同じようにして、若い者を私のところによこした。その手には

一通の開封した手紙を持っていた。6:6 それには次のように書いてあった。「諸国民の間に言いふらされ、また、ゲシムも言っているが、あなたとユダヤ人たちは反逆をたくらんでおり、そのために、あなたは城壁を建て直している。このうわさによれば、あなたは彼らの王になろうとしている。6:7 また、あなたはエルサレムで、自分について宣言させるために、預言者たちを任命して、『ユダに王がいる。』と言わせている。今にこのようなことが王に聞こえるであろう。さあ、来なさい。いっしょに相談しよう。」6:8 そこで、私は彼のところに人をやって言させた。「あなたが言っているようなことはされていない。あなたはそのことを自分でかってに考え出したのだ。」と。6:9 事実、これらのことはみな、「あの者たちが氣力を失って工事をやめ、中止するだろう。」と考えると、私たちをおどすためであった。ああ、今、私を力づけてください。

ネヘミヤ個人への攻撃は、脅しとでっち上げの嘘です。手紙が開封されていたということは、ここに書かれていることが人々に広まっているということを暗に示しています。こうやって、ネヘミヤがユダの王になりたがっているということが、もしやペルシヤ王に伝わっているというように仕向けているのです。そして、彼が工事をする氣力を失わせようという魂胆でした。けれども、ネヘミヤはきっぱりとでっち上げであると答えました。そして、主に対して祈りました。再び、ネヘミヤの力の源泉、祈りであります。私たちは中傷を受けると、それは違うということを何とかして分かってもらおうとして説明を始めてしまいます。けれども、相手の目的は主の働きを止めさせることですから、その説明自体が敵の思う壺なのです。

公にさらされている人であれば、必ずこの攻撃を受けます。教会の指導者も例外ではありません。今は、教会の牧師で罪を犯し、社会的問題を引き起こしている人たちもいます。しかし、一切そのようなことはしていないのに、インターネット上で書き連ねられる人々もいます。テモテ第一 5章 19 節に、「長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。」とあります。決して一人だけの証言で受け入れてはいけません。悪意をもった中傷である可能性が高いのです。

### 3B 御言葉に背かせる教師 10-14

ネヘミヤにとって、最も過酷であった攻撃は次ではなかったかと思います。

6:10 私がメヘタブエルの子デラヤの子シエマヤの家に行ったところ、彼は引きこもっており、そして言った。「私たちは、神の宮、本堂の中で会い、本堂の戸を閉じておこう。彼らがあなたを殺しにやってくるからだ。きっと夜分にあなたを殺しにやってくる。」6:11 そこで、私は言った。「私のような者が逃げてよいものか。私のような者で、だれが本堂にはいって生きながらえようか。私ははいつて行かない。」6:12 私にはわかっている。今、彼を遣わしたのは、神ではない。彼がこの預言を私に伝えたのは、トビヤとサヌバラテが彼を買収したからである。6:13 彼が買収されたのは、私が恐れ、言われるとおりにして、私が罪を犯すようにするためであり、彼らの悪口の種とし、私をそしるためであった。6:14 わが神よ。トビヤやサヌバラテのあのしわざと、また、私を恐れさせよう

とした女預言者ノアデヤや、その他の預言者たちのしわざを忘れないでください。

ネヘミヤは、シェマヤを信頼していました。彼は祭司であり、預言者でありました。ネヘミヤが何か相談しに、彼の家にやって来ました。すると彼は、その戸を閉じていたのです。そして、預言と称して、「家の中に入って来たらあなたは殺されてしまう。誰も入ってくることのできない、神殿の本堂中で会おう。」と言ったのです。これが、絶対にできないことはご存知ですか？聖所の中に入るのは、アロン直系の祭司のみであり、その他の者たちは入ってはいけません。かつて、ユダの王ウジヤが香をたこうとしたら、らい病にかかり、彼は隔離されました。

ですからネヘミヤは、見分けました。彼はモーセの律法、また先祖たちの歴史を知っていたのです。だからこれが、神からのものではないと見分けることができたのです。では、なぜそんなことを発言したのか？後で分かったのでしょうか、彼もまた他の預言者も、トビヤやサヌバラテによって買収されていたのです。

これこそ、最も恐ろしい攻撃です。自分の信頼する聖書教師や説教者が、自分の利己的な目的のために神の名によって語るようになります。そういう人は自分たちに何か、期待しているものがあります。そして、自分が達成したい隠れた目的があります。それがかなえられないと知ると、攻撃的になり神の名によって告発し始めるのです。しかし、ここで試されるのが神の御言葉です。ネヘミヤは、本堂の中に入ってはいけないということを、たとえ相手が預言者であろうと見抜いたのです。それは、彼が御言葉に接していて、霊的識別力があったからです。

#### 4B 騙される代表者ら 15-19

6:15 こうして、城壁は五十二日かかって、エルルの月の二十五日に完成した。6:16 私たちの敵がみな、これを聞いたとき、私たちの回りの諸国民はみな恐れ、大いに面目を失った。この工事が、私たちの神によってなされたことを知ったからである。

エルルの月は、9月20日ぐらいです。7月の終わりに始めて、そしてこの日に完成しました。たった五十二日です。物理的な建設はとても容易だったのですが、これまで何年も城壁が壊されていたということは、物理的な建設ではなく、霊的な建て直しがいかに困難であり、熾烈な戦いかを物語っています。私たちはしばしば、自分の霊的鈍感さにじれっとなります。なぜ、このような簡単なことさえ自分ではできなのか？と思う時がありますね。けれども、だからこそネヘミヤ記を学んでいます。彼のように主にすがるのであれば、そこには神の知恵があり、霊の戦いに打ち勝つことができるのです。

そして、私たちはネヘミヤのように、神の共同体として敵の面目を失わせてみたいですね。それは、御霊の一致によってしっかりと建てられ、結び合わされている時に、敵は大いに面目を失います。そして、ネヘミヤは再び神に栄光をお返ししています。これは神の御心だったからこそ、これだ

け早く完成させることができたのです。しかしネヘミヤは、水面下で起こっていた熾烈な戦いを紹介します。

6:17 また、そのころ、ユダのおもだった人々は、トビヤのところにひんばんに手紙を送っており、トビヤも彼らに返事をしていました。6:18 それは、トビヤがアラフの子シェカヌヤの婿であり、また、トビヤの子ヨハナンもベレクヤの子メシュラムの娘を妻にめとっていたので、彼と誓いを立てていた者がユダの中に大ぜいいたからである。6:19 彼らはまた、私の前でトビヤの善行を語り、私の言うことを彼に伝えていた。トビヤは私をおどそうと、たびたび手紙を送って来た。

なんと、ユダの主立った人々の中に、アモン人トビヤと縁を結んでいた者たちがいたのです。アラフ族にシェカヌヤが自分の義父でありました。そして、トビヤの子ヨハナンは、城壁の工事に携わっていたメシュラムを自分の舅にしていたのです(3:4,30)。エズラが嘆き悲しんでいたこと、異邦人との婚姻がこのような形で代表者たちの中から浸透していました。そしてこの肉のつながりが、霊のつながりよりも強くなってしまっていたのです。

このつながりによって、ユダヤのおもだった者たちは、ネヘミヤに対する陰湿なトビヤの攻撃に対して盲目になっていました。トビヤの表面的な善行にのみ目が留まり、ネヘミヤがなぜトビヤをそんなに嫌っているのかが分からないという状態でした。ネヘミヤが悪者になってしまったのです。指導者は時に、たとえ悪者に思われても絶対に譲れない、妥協してはいけないことがあります。トビヤの悪行は、ネヘミヤにしか分からないようにされていました。そしてネヘミヤは、このような手紙が頻繁に交わされていたのを知りながらも、工事を熱心に行っていました。ネヘミヤは、本当に自分が何をしなければいけないのかを分かっていた人でありました。

先ほどお話ししたように、ネヘミヤは決して教会の牧者だけに当てはめる話ではありません。主は、ご自分に仕える者に、その忠実さに応じて任せていけます。そして、ネヘミヤと同じような戦いが拡がっていくことを、自分の霊の目で見ることになります。それは孤独な戦いです。ネヘミヤにしか分からない敵の陰湿な攻撃も出てきます。しかし彼には味方がいました。主ご自身です。この方に祈り、この方に拠り頼みました。そして、確かに主は事を成し遂げてくださいました。